

---

研 究 報 告

---

特別養護老人ホームにおける看取りケアに関する文献検討  
－看護職による看取りケアと入居者・遺族の体験－

内山 孝子

Review of Articles on End-of-Life Care at Special Nursing Homes  
for the Aged  
: End-of-life care provided by nursing professionals  
and the experiences of residents and families

Takako Uchiyama

キーワード：特別養護老人ホーム、看取り、看護実践

key words : Nursing home, end-of-life care, nursing care

**Abstract**

The aim of this review of domestic research articles was to find what kind of end-of-life care was provided by nursing professionals at special nursing homes for the aged (hereafter Tokuyo) and what experiences the residents and their families had as a receiver of the care.

It was revealed that when accepting a new resident, the nurses at a Tokuyo assumed that they would provide end-of-life care to the resident. Based on this assumption they endeavored to assure a peaceful death sought by a resident and the family by supporting residents and their families' decision making; proactively determining the timing of end-of-life care from the residents' food intake and/or skin conditions and getting cooperation from medical doctors as well as care-giving professionals; and assisting the residents to continue their own lifestyle and encouraging their families to participate in the care.

The Tokuyo residents desired to spend the last days peacefully surrounded by family members and loved ones, feeling connected with them. The families had first felt rather guilty about having decided to let a family member die at Tokuyo, but later gained the peace of mind, convinced of the quality care provided by the nurses and other care givers, and wanted to rely on them. The families eventually became satisfied that the residents received the end-of-life care at Tokuyo. The challenges for the future will include observing the actual end-of-life care provided by nurses working at Tokuyo for the residents and their families, and describing the findings.

---

受付日：2015年7月23日 受理日：2015年10月26日

日本赤十字看護大学大学院博士後期課程 Doctoral Program, Japanese Red Cross College of Nursing

## 要 旨

本稿の目的は、特別養護老人ホームの看取りケアの実践内容と、その受け手である入居者と家族の体験を明らかにすることである。

結果、看護職は看取りを前提に入居者を受け入れ、食事摂取状況や皮膚がきれいになってゆくことなどから看取りが近いことを判断、特養で看取れるかを判断、医師の協力を得る、介護職を支えながら家族がケアに参加できるよう調整、これまでの生活を継続する援助を提供することで入居者と家族が希望する安らかな死を支援することを重視していた。

入居者は、家族や人とのつながりを大切に穏やかに過ごしたいと願い、日常の会話の中で入居者が希望する死を表現する可能性を示唆していた。家族は、特養での看取りを決断することに葛藤を抱きつつ、特養を看取りの場所を選んでいった。看護職が安心できるケアを入居者と家族に提供することで、家族は特養に看取りを任せたい、看取りを行ってよかったと考えるようになっていった。

### I. はじめに

人口の高齢化、核家族化や高齢世帯の増加などによる家族介護力の低下を背景に、“終の棲家”としての機能をもつ特別養護老人ホーム（以下、特養）の必要性が高まっている（大村，2013，p.47）。2006年には介護保険法改正により「重度化対応加算」、「看取り介護加算」が創設された。以来、特養入居者がその施設での亡くなる割合は、44.8%となり、特養での看取りは増加傾向にある（池上，2010，p.18）。また住み慣れた特養で看取りを希望する家族も88.6%と多く（池上，2010，p.34）、特養での看取りケアに対する遺族の評価が高いことも明らかになっている（池上・池崎，2013；出村・村中，2010）。このように特養は“終の棲家”としての機能を果たし始めている（那須・深堀，2014，p.34）。

近年では、特養には医療ニーズの高い入居者が増加している（三菱総合研究所，2013，p.48）。しかし、医師の96.8%が非常勤で、1ヶ月の平均勤務時間は20時間（三菱総合研究所，2013，p.23）と短く、十分な医療機能が備わっていないため、看護職の責任や負担は大きい（全国老人福祉施設協議会，2015，p.43）にもかかわらず、特養の看取りにおいて中心的な役割を果たすのは看護職であり、その主体性を発揮することでその人らしい安らかな死への援助ができる可能性もある。これらのことから看護師の看取りケアの質に関心が寄せられる。

特養における看取りに関する看護研究は、2000年の介護保険制度開始以降、散見されるようになり、「看取り介護加算」創設後、徐々に増加した。これまでの特養における看取りに関する研究は、施設における看取りの現状の把握、看護職の役割の明確化、看取りの導入に向けた課題の分析をねらいとしたものが多い。実際に特養の看護職がどのような看取りケアを行っているかに焦点を当てて調査したものは少ない（長谷川，2004；小山・水野，2010）。

そこで本稿では、特養の看護職による看取りケアに関する研究の動向と、看取りケア実践内容とその受け手である入居者と家族の体験を明らかにすることを目的に、国内の研究文献の検討を行った。

### II. 文献検討の方法

#### A. 文献検索の手順

本稿では、特養における看取りケアに関する国内文献のみを対象とした。欧米の長期ケア施設やNursing Homeと日本の特養では、保険制度上実施可能な医療行為、職員の配置基準、文化的背景や民族による終末期の過ごし方、施設を利用する高齢者の身体機能・認知機能、職員の教育水準などの違いがあり（三富，2013；坂川，2014）、比較検討することは難しいと考えたためである。

検索する文献は、医学中央雑誌Web版Ver.5に収集されている1983年3月から2014年12月までのものとした。検索のキーワードは、「介護老人福祉施設」or「特別養護老人ホーム」と「看取り」or「終末期」と「看護」である。「原著」「抄録あり」の条件を付加した。

#### B. 分析方法

まずは特養における看取りに関する研究の動向を知るため、論文件数の年次推移を明らかにした。次いで研究テーマ別に文献を分類し、その中から看護職による看取りケア及び入居者・遺族の体験に関する記述がある文献を中心に、分析した。

### III. 結果と考察

#### A. 文献の年次推移（図1）

文献検索の結果、特養における看取りに関する文献80件を得た。初出文献は2001年であった。その後、数年は毎年2～4件であったが、徐々に増え、2010年は11件であった。その後は毎年6～8件が続いている。

2010年の11件の文献には、全国の特養における看取

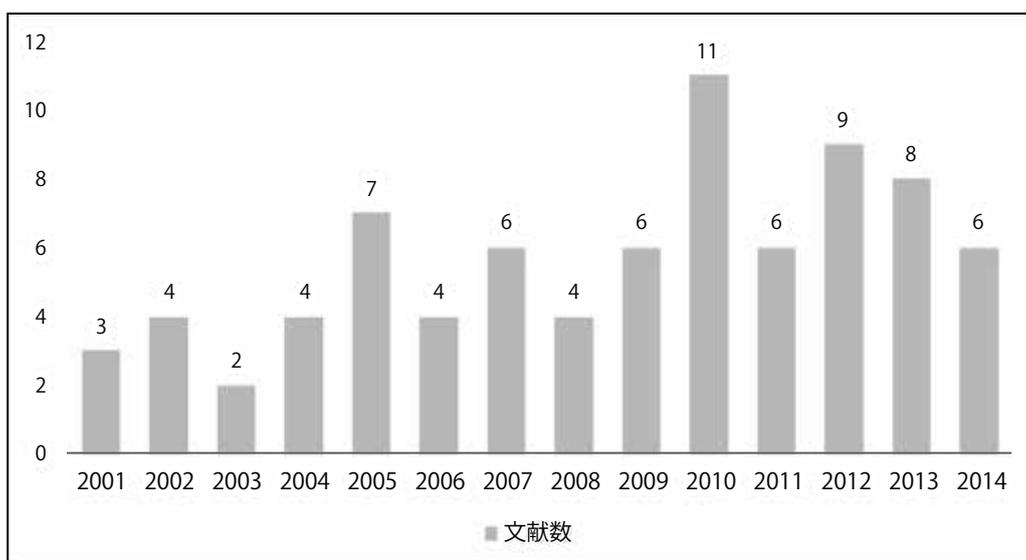


図1. 特養における看取りケアに関する看護研究の年次推移

りの実施状況、導入に当たっての課題を明らかにすること等を目的とした実態調査が4件含まれる。2006年の「看取り介護加算」創設により研究活動が活発化したことが影響していたと考えられる。

#### B. 研究テーマによる分析（表1）

以上の80文献をテーマ別に分類した結果を表1に示した。表1に示した通り、施設の看取り加算者の有無と看取り体制の関係や、夜勤体制・医療体制・人員配置の整備の必要性、看護・介護職の看取り対応力の底上げ、他職種との業務整理と分担の必要性、入居者と家族への支援の充実など施設全体の取組み課題は明らかにされているが、看護職がどのような看取りケアを行っているかがい知ることのできる文献は多くない。

本稿では、表1のうち、特養における看取りケアの実態を明らかにするため、「看護職による看取りケア（介護職を含む）」17文献から、看護職の看取りケア内容が記述されている7件、「家族・遺族の体験」6文献から遺族を対象とした4件、「入居者の体験」から

4件、計15件を選択し検討した（表2参照）。

#### 1. 特養の看護職による看取りケア（表2）

看取りに積極的に取り組んでいるかどうかを問わず、ある地域の施設すべてを対象として行われた研究が2件、看取りに積極的に取り組んでいる施設に限定して行われた研究が3件、看護職が看取りの始まりをどのように捉えるのかについての研究が2件あった。

ある地域の施設すべてを対象として行われた研究の一つには、岩本・南家・有松他（2007）によるものがある。岩本ら（2007）は、特養に入所するターミナル期（死亡前6ヶ月間）にある入居者の権利擁護を支える看護実践を明らかにすることを目的に面接調査を行い、KJ法を用いて分析した。その結果【本人以外の意志によるケア方針決定の現実に対するジレンマ】【意思や思いを把握し本人の意思が反映できるよう支援】【観察を密にし情報提供する】【心安らかに最後まで生活することができるよう支援】【人間としての尊厳を大切にす】を抽出した。この研究では、看護職として入居者の権利擁護のため、ケア方針や医療に入居者の意思・状態を反映させようとするが、家族や医師の意思でそれらが決定されるジレンマがあることも明らかにされた。

同じく青田・太田（2012）は、看取りに関わった看護職に対し、看取りの取り組みについて面接調査を行い、KJ法で分析した。その結果、【慮り苦痛を緩和する】【高齢者をトータルに捉えるケア】【家族の様なケア】【ターミナルの段階を理解できず悩む】【最期までその人らしさを大切にすケア】【社会が看取る時代の流れ】【介護職の専門性を尊重する】を抽出した。【家族の様なケア】は、特養という生活の場ならではの特徴的なケアと考えられる。社会的に施設での看取りを期待されているが、特養での看取り経験が浅い看護職・

表1. 特養における看取りに関する看護研究テーマ別分類

テーマ	n=80 文献数
施設の看取りへの取組みと課題	30
看護職による看取りケア（介護職を含む）	17
看護職・介護職の看取りに対する意識	16
家族遺族の体験	6
入居者の体験	4
事例検討	3
文献検討	2
その他（教育プログラム・アクションリサーチ）	2

表2. 特養の看護職による看取りケア

看護職：Ns 介護職：CWとする

著者	年	目的	研究デザイン	対象者	調査内容	結果
岩本テルヨ 南家貴美代 有松操 森田敏子	2007	看護アドボカシーを明らかにする	半構成的面接 KJ法	地方都市施設 Ns18名 平均年齢46.6歳 ターミナルケア経験 0~150例	特養のターミナルケアにおける看護アドボカシー実践について	【本人以外の意志によるケア方針決定の現実に対するジレンマ】 【意思や思いを把握し本人の意思が反映できるよう支援】 【観察を密にし、情報提供する】 【心安らかに最後まで生活することができるよう支援】 【人間としての尊厳を大切に】
井澤玲奈 水野敏子	2009	看護援助を明らかにする	半構成的面接	積極的な施設Ns12名	印象に残る場面、自分が行ったこと、その時に思ったこと	【利用者が入所時から過ごしてきた特養での生活を維持する】 【臨終を迎えた時の場を整える】 【利用者の残された時間を充実させるために各専門職の援助をまとめる】
青田正子 太田節子	2012	取り組みを明らかにする	半構成的面接 KJ法	Ns7名	ターミナルケアの取組に対する考え方、ケア方針、ケアの方法、NsとCWの連携	【慮り苦痛を緩和する】 【高齢者をトータルに捉えるケア】 【家族のようなケア】 【ターミナルの段階を理解できず悩む】 【最期までその人らしさを大切に】 【社会が看取る時代の流れ】 【介護職の専門性を尊重する】
長畑多代 松田千登勢 山内加絵 江口恭子 他	2012	看護実践の内容を明らかにする	半構成的面接 自記式質問紙	Nsリーダー24名 質問紙：43名 (回収率65.1%)	具体的な実際の事例に即し、入居から退所までのプロセスに沿った看護実践の内容、目的、意図	【看取りを前提に入居を受け入れる】局面的看護実践 【看取りに近いことを察知して準備する】局面的看護実践 【看取りが現実のものとなり実践する】局面的看護実践 【家族や他入居者をフォローしつつケアを振り返る】局面的看護実践 【看取りにおける看護実践の前提・基盤】
鈴木亨 流石ゆり子	2012	その人らしい最期を迎えるために必要なケアを明らかにする	半構成的面接 KJ法	Ns2名 CW2名	大事にしていること、その人らしい最期とは、どのようなケアを行っているか、必要なケアは何か	【ひとり一人をよく知るために生活歴、価値観等について話を聴いたり、様々な方法を用いて注意深く観察する】 【その時その人の意思やニーズを尊重し、関わる】 【看取りケアは、計画段階から家族も含めた関連多職種が協働して行う】 【亡くなった後も、本人と残された家族へのケアに職員全員で関わる】 【居室の環境を、安心して過ごせるよう整える】 【最期が近くなったら、独りぼっちにせず、声かけやスキンシップを行いスタッフ皆で見守る】 【旅立ちの際は、身なりを整え自然体で送り出せるようにする】 【感染防止と共に、苦痛を取り除き安楽にする】
白岩千恵子 竹田恵子	2013	看取りケア開始時期の捉え方を明らかにする	自記式質問紙	地方都市82施設のNs (回収率76.7%) 有効回答232部	特養の看取りケアはいつから始まると考えるか	【入所時】(15.5%) 【医師が看取り期と判断した時】(56.9%) 【臨終まぎわ】(1.7%) 【自由記述 (回答60名)】 【食事をうけつけなくなり、体重減少がみられる】 【体全体のレベルダウンがみられる】 【本人や家族が看取りを希望した時】 【看護師が死を肌で感じ取る】
岩瀬和恵 勝野とわ子	2013	看護師が高齢者の死期を判断したサインとサインを察した時期を明らかにする	半構成的面接	積極的な施設Ns8名	死が近づいていると感じたのはいつくらい前か、どのようなサインからか	第1段階 (死の約1ヶ月前から、特養看護師が察知したサイン) 【目力のなさ】 【顔色の悪さ】 【活気がないこと】 【生きることへのこだわりがなくなる】 【反応の低下】 【傾眠がち】 【臭い】 【皮膚がきれいになってゆくこと】 【食事摂取量低下】 【突然の経口摂取困難】 【体力低下】 【回復と悪化を繰り返すこと】 【通常より約20%の体重減少】 【通常より約50mlの尿量減少】 第2段階 (高齢者の死の約2日前に観察されるサイン) 【呼吸状態の変化】 【痰喀出量増加】 【意識レベルの低下】 【通常より約30mmHgの血圧の低下】

介護職は、ターミナル期の入居者の詳細な変化をとらえ難くターミナルの段階を理解できず悩むことも明らかにされた。

次いで、看取りに積極的に取り組む施設を対象に行われた研究である。井澤・水野（2009）は、死期が近づいている入居者へのケアについて、特養の看護職を対象に面接調査を行った。その結果【利用者が入所時から過ごしてきた特養での生活を維持する】【臨終を迎えた時の場を整える】【利用者の残された時間を充実させるために各専門職の援助をまとめる】を抽出した。この研究では、これらの施設の看護職が、入居者が最期をどの場で過ごすのが最適なのか判断し、最期の瞬間まで彼らが希望するやり方で食事、排泄、入浴、移動、更衣や洗面などを援助すること、入居者が最期まで経口摂取できるよう努め、特養での生活が継続できること、そのために各専門職による援助をコーディネートすることを重視していることが明らかにされている。

鈴木・流石（2012）は、終末期ケアに熟練した看護職と介護職を対象に、その人らしい最期を迎えるために必要なケアについて面接調査を行い、KJ法を用いて分析した。その結果、【生活歴、価値観等につい

て聴いたり、様々な方法を用いて注意深く観察する】【その時その人の意思やニーズを尊重し関わる】【看取りケア計画段階から家族も含めた関連多職種が協働して行う】【本人と残された家族へのケアに職員全員で関わる】【居室の環境を、安心して過ごせるように整える】【最期が近くなったら、独りぼっちにせず、声かけやスキンシップを行いスタッフ皆で見守る】【旅立ちの際は、身なりを整え自然体で送り出せるようにする】【感染防止と共に、苦痛を取り除き安楽にする】が抽出された。この研究では、看取りの時期だけでなく入居者を看取った後の家族のケアまでが明らかにされており、病院と違って入居者や家族と職員の関わりが長い特養の場の特徴が現れている。この研究は対象を、終末期ケアの熟練スタッフとし、看護職と介護職の区別をしていない。

長畑・松田・山内他（2012）は、特養における看取りケアの標準化を目的として、看護リーダーに対する面接調査から看取りを支える看護実践リスト案を作成した。このリスト案はさらに看護リーダーを対象にした調査を通じて、妥当性の確認と追加修正が加えられた。その結果、特養での看取り看護実践リストは【看取りを前提に入居を受け入れる】【看取りに近いこと

を察知して準備する】【看取りが現実のものとなり実践する】【家族や他入居者をフォローしつつケアを振り返る】の4局面ごとに、[高齢者に対するケア][家族に対するケア][介護職への支援][医師との連携]の枠組みで分類された。入居時から施設での看取りを視野に入れて情報収集や意向確認を行い、看取り終えるまでの経過に沿った大項目と小項目に整理され、小項目では、入居から看取り後までのプロセスに沿って網羅的に看護内容が行動レベルで提示されたことが新たな知見である。医療ニーズへの対応に限界がある特養においては、入居者と家族に「ここで看取ってもらいたいと思ってもらえる信頼関係」の構築と介護職との協働関係の構築はケアの前提として必須とされていた。長畑らは、今後各施設の状況に応じた看取りのガイドライン作成時の雛型として活用されることを期待している。

看護職が看取りの始まりをどのように捉えるのかについて行われた研究の一つには、白石・竹田(2013)の研究がある。白石ら(2013)は看護職が看取りケアの始まりをどのように捉えているのか、どのような状況からそれを判断しているのかについての質問紙調査を行い、看取りケアの開始時期は、「医師が看取り期と判断した時」(56.9%)、「入所時」(15.5%)、「臨終まぎわ」(1.7%)であり、これらの選択肢を選択せず「自由記述に回答」したものが25.9%であった。自由記述から、【食事をうけつけなくなり、体重減少がみられる】【体全体のレベルダウンがみられる】【本人や家族が看取りを希望した時】【看護師が死を肌で感じ取る】を抽出した。半数以上の対象者は、医師が看取

り期と判断したときを看取りケアの開始時期と捉えていたが、看護職は食事がとれなくなるなどの変化を判断の指標にしていることが明らかになっている。また看護職は、医師が判断するよりも前に入居者が看取りの時期に入りつつあることを捉えていることも明らかになっている。

岩瀬・勝野(2013)は、看取りではなく死期という言葉を用い、看護職が入居者の死期を判断したサインとそのサインを察した時期を面接調査し、死期を判断するのに2つの段階があったことを示した。第1段階は、死の約1ヶ月前あたりであり、それまでの安定した日常生活から変化することから看護職が察知したサインで【目力のなさ】【顔色の悪さ】【活気がないこと】【生きることへのこだわりがなくなること】【反応の低下】【傾眠がち】【死臭】【皮膚がきれいになってゆくこと】【食事摂取量低下】【突然の経口摂取困難】【体力低下】【回復と悪化を繰り返すこと】【通常より約20%の体重減少】【通常より約50mlの尿量減少】であった。第2段階は、高齢者の死の約2日前に観察されるサインで、【呼吸状態の変化】【痰喀出量増加】【意識レベルの低下】【通常より約30mmHgの血圧の低下】であった。これらの中で【皮膚がきれいになってゆくこと】は新たな知見である。看取りを積極的に行う施設では、点滴をしないなど、極力医療的な介入を排して看取りが行われていることを反映しているものと推察していた。

## 2. 特養の入居者を対象とした文献(表3)

流石・伊藤(2007)は、後期高齢者のQuality of Life(以下、QOL)とその関連要因について明らかに

表3. 特養の入居者の体験

著者	年	目的	研究デザイン	対象	結果
流石他	2007	QOLとその関連要因を明らかにする 「QOL」とは、高齢者自身の主観的評価結果としての生活満足度、日々の生活場面における生きがい・喜び・張り	質問紙 QOL ①生活満足度LSIK ②生きがい7項目 関連要因 ③身体活動能力 Barthel Index ④不安状態 STAI(20項目) ⑤ソーシャルネットワーク(SNW) 高齢者版評価指標 ⑥主観的健康感(4件法)	地方都市特養26施設、日常会話による意思疎通が可能な192名 年齢86.1±6.2歳 平均介護度2.4±1.1 平均入所期間3年8か月	①生活満足度は、75～89歳の後期高齢者群に比べ90～100歳の超高齢者群において有意に高かった。家族や親族の存在や同僚に実際的な支援を行っている者の生活満足度が高かった ②家族や友人などの面会に生きがい・喜び・張りを強く感じており、中でも子供の存在は特に強く関与している ③身体的活動能力とQOLの関連はなかった ④普段の心の状態では、不安低群が、主観的健康高群、支援者がいる者などの、精神・心理的側面と生活満足度は関連していた
流石他	2008	今後の生活への気がかり・心配を明らかにする	内容分析(ベレルソン)	流石他(2007)の調査、自由記述欄に回答のあった152名の「今後の生活に対する気がかり、心配」に関する記述部分	【最後までここ(施設)で暮らしていく覚悟を決めている】 【日常生活に対する不満と願望】 【家や家族が心配で帰りたい】 【先のこと不安だが心配しても仕方がない】 【人に迷惑をかけず穏やかに暮らしていきたい】 【日々の生活やいさかたに対する姿勢・願望】 【死に方に対する願望】 【安気に暮らしている】 【集団生活での人間関係は難しい】 【その他】の10カテゴリーを抽出
牛田他	2007	日常的に表現する「お迎えを待つ」とは何かを探ることにより、どのように自らの死を迎えたいと考えているのか明らかにする	半構成的面接 変則KJ法	入所後半年以上経過し、終の棲家として本人が了解している日常会話が可能な者13名	【お迎えを待つという日常の心境】 【お迎えを待つ心境に至る基盤】 【家族に期待する】 【自分を大切に】 【人を気遣う】 【自尊心の喪失】 【生活史の一部に位置づけなおす】
小楠	2008	回想を聴くことで終末期の意思がどのような形で表出されるのか記述する	質的記述的研究	自分のことをある程度語れる特養の入居者5名の女性	1. 「家族」をキーワードに人生を回想する高齢者 2. 「食」「生」をセットで感じ取っている高齢者 3. 高齢者の関心は「場所」ではなく、誰とともにいたいという「ひと」 「希望する死」について表現するきっかけとしての回想の可能性

することを目的に、26施設の192名の入居者を対象に質問紙を用いた個別面接調査を実施した。その結果、入居者は家族・友人などの面会、中でも子供（娘）の面会時に生きがい・喜び・生活の張りを強く感じること、家族の面会が入居者の生活満足度に大きく関与していることが明らかになった。また、気兼ねなく話せる家族・親族が3～4人いること、重要決定時他者への相談をしていること、施設内の友人・知人に対して実質的支援を時々していることがQOLに関連しているが、QOLと身体的活動能力との関連はないことが明らかになった。さらに自由記述欄に回答のあった152名の記述内容から、入居後の生活に対する気がかり・心配について分析し（流石・伊藤, 2008）、【最後までここ（施設）で暮らしていく覚悟を決めている】【日常生活に対する不満と願望】【家や家族が心配で帰りたい】【先のことが不安だが心配しても仕方がない】【人に迷惑をかけず穏やかに暮らしていきたい】【日々の生活やいきかたに対する姿勢・願望】【死に方に対する願望】【安気に暮らしている】【集団生活での人間関係は難しい】【その他】を抽出した。入居者は、特養を“終の棲家”とすることに折り合いをつけ、覚悟を決めて生活していると推察しており、研究者らは入居者が安心して過ごせる生活環境（人的・物的）を保障することが不可欠であると述べている。

牛田・藤巻・流石（2007）は、入居者がどのように死を迎えたいと考えているのかを明らかにすることを目的に、13名の入居者に対して面接調査を実施し、彼らが日常的に表現する「お迎えを待つ」とは何かを探究した。その結果、【お迎えを待つという日常の心境】【お迎えを待つ心境に至る基盤】【家族に期待する】【自分を大切にする】【人を気遣う】【自尊心の喪失】【生活史の一部に位置づけなおす】を抽出した。入居者は「お迎えを待つ」ことを当たり前のこととして受け入れ、日常生活の一部として淡々と語っていたこと、またお迎えの待ち方は人それぞれであることを明らかにしている。研究者らは、入居者が日常会話の中で、死

に対する希望を語る可能性を示唆している。

小楠（2008）も、入居者がどのように終末期の意思を表出するのかを記述することを目的に、5名に回想を中心とした対話を実施した。その結果、入居者は家族、特に子供をキーワードに人生を回想し、ごく自然に自分の人生の終わりについて語り、食べられなくなった時を死が近いサインとして静かに受け止めようとしていること、最期を過ごす場所には殆どこだわらず、最期まで人とのつながりを求めていることを明らかにした。同じく研究者は、回想を中心とした対話を通して、入居者なりの最期までの生き方の望みが表現されることで、入居者に応じた看取りケアにつなげていける可能性を示唆している。特養では認知症を持つ高齢者の割合が高いことから、今後は認知症を持つ高齢者の終末期の願いをどのように汲み取るのか検討することを重要な課題と述べている。

### 3. 特養で看取りをした遺族の体験（表4）

出村・村中（2010）は、特養での看取りが8割を超える地方の特養で看取りをした遺族に質問紙調査を行い、看取りの満足感に「特養で提供されるケア」「職員が親切」「静養室の使用」「看護職からの説明」が関連していたことを明らかにした。研究者らは、家族は入居者を特養に入所させたことや、病院での治療を行わず特養を看取りの場所として選んだことなどについて揺らいでおり、看護職がそのような家族の気持ちを聞き、支えたことが満足感につながったと考察している。さらに、この調査の自由記述の内容より遺族の看取りの心情を分析した結果（出村・野村, 2012）、【特養で看取ったことでの満足感】の他に、遺族には【心残り】【職員の対応への不満】があること、家族は入居者と最期のときを共に過ごすことができる【空間の確保】を要望していることが明らかにされた。

永田・佐川・水野（2014）は、入居者と遺族が看取りの場所として病院ではなく特養を選んだ理由について面接調査を行った。その結果【入居者は高齢なので、入居者と遺族は無理な延命治療で、痛い、辛い思いを

表4. 特養で看取りをした遺族の体験

著者	年	目的	研究デザイン	対象	結果
出村他	2010	遺族の看取りに対する満足感と関連要因を明らかにする	質問紙（独自作成） ①満足感5項目 ②関連要因 ケアとケア環境職員からの説明 静養室への移動説明の時期	地方都市の特養で積極的に看取りに取り組む施設で看取りをした遺族家50名	①「非常に満足している」76.0%、「やや満足している」6.0%、「普通」18.0% ②特養で看取りをした遺族の満足感の要因：「特養で提供されるケア」「静養室の使用」「職員が親切」「看護職からの説明」の4項目
出村他	2012	遺族の心情を明らかにする	質問紙に自由記載	上記の研究対象者のうちの遺族31名	【特養で看取ったことでの満足感】 【心残り】 【職員の対応への不満】 【空間の確保】
永田他	2014	病院ではなく特養を選んだ理由を明らかにする	半構成的面接 要約的内容分析	積極的に看取りケアを実施している関東地方の特養にて死亡した入所者遺族のキーパーソン35名	【入所者は高齢なので、入所者と遺族は無理な延命治療で痛い、辛い思いをしたくなかったから】 【入所者と遺族は自然な経過を希望していたから】 【入所者と遺族は看取りの体制に入る前から決めていたから】
那須他	2014	特養で入居者を看取った遺族の経験を明らかにすること	半構成的面接法 Colaizziの現象学的分析	地方都市特養3施設 入居者の主な面会者であった家族介護者15人	【入居者との絆の実感】 【入居者のために自分にできるケアの模索】 【職員や同室者との折り合い】 【医療処置と看取りの場の選択における葛藤】 【大切な人を失っていくことへの対処】 【入居者の人生と看取りの意味づけ】

したくなかったから】【入居者と遺族は自然な経過を希望していたから】【入居者と遺族は看取りの体制に入る前から決めていたから】を抽出した。研究者らは、看取り期以前からの長い入居期間の中で、入所者と家族のニーズに敏感に対応し、安心できるケアを提供し、信頼関係を構築することが重要と考察している。

那須・深堀（2014）は、入居者を看取る家族の経験を明らかにすることを目的に、面接調査を行った。その結果【入居者との絆の実感】【入居者のために自分のできるケアの模索】【職員や同室者との折り合い】【医療処置と看取りの場の選択における葛藤】【大切な人を失っていくことへの対処】【入居者の人生と看取りの意味づけ】を抽出した。研究者らは、家族が入居者へのケアの模索と葛藤をくりかえしていることを理解し、彼らが入居者の死を、満足感をもって振り返ることができるよう関わる必要があると述べている。

#### Ⅳ. 考察

##### A. 特養の看護職による看取りケアに関する研究の現状

特養の看護職による看取りケアに関する研究は、ある地域の複数の施設を対象に、看取りに積極的に取り組んでいるかいないかを問わず、看取りの実施状況や課題を調査するものから、積極的に看取りに取り組む施設のケア実践を探求するものへと焦点が移行しつつある。前者では、入居者が施設での看取りを希望していても病院に送らざるを得ない看護職の葛藤などが明らかにされ、後者では特養での看取りの具体的な実践内容が明らかになりつつある。

##### B. 看護職による看取りケア実践内容

これまでの研究により、特養での看取りを実現するには、看取りを任せてもらえるような入居者・家族との信頼関係を築くこと、看護職自体の配置が少ないことから介護職・医師との協働が不可欠であること、施設で看取りを行うには職員間で看取りに対する共通認識をもつことが重要であることが明らかになっている。

入所時から看取りまでの時期にわたる看取りケアとして、入居者に適切な時期に施設での看取りについて希望を確かめること、日々の食事摂取量や体重の変化、皮膚の状態などから看取りの時期が近づいていること及び入居者が施設で看取ることができる状況かを見極めること、施設で看取る場合には苦痛をできるだけ和らげ、今までのとおりの生活が続けられるように援助すること、家族の参加を促し、職員も家族のように接することで入居者にさみしい思いをさせないことなどのケアが明らかにされている。また看取り後には、その人らしい身なりを整えること、遺族へのケア、看取りについての振り返りが行われていた。

できる限り苦痛を緩和し、死に行く人の生活を支え

ることは、病院、施設を問わず看取りの看護に共通する実践である。特養では、看護職がより自律的に看取りの時期を判断し、入居者が希望する場で最後が迎えられるよう介護職や医師との連携を図り、職員との温かな交流のなかで、最期までその人らしい生活が継続できるように援助しているという特徴が浮かび上がっている。

##### C. 特養で看取った遺族の体験

遺族を対象とした研究からは、家族は、特養での看取りの決断に葛藤を抱きつつ、入居者に苦しい思いをさせたくないと考え、特養を看取りの場所に選んでいた。看護職が大切な人を失うつらさを抱く家族の思いを受け止めつつ、入居時から入居者と家族のニーズに敏感に対応し安心できるケアを提供することで、家族は特養での看取りを任せたい、看取りを行ってよかったと考えるようになっていた。また、看取り期には、家族に対する看護職による丁寧な説明と、可能な限りの苦痛と症状の緩和、入居者と家族がゆっくりと時間を過ごすことができる環境（静養室や個室）を求めていることが明らかになっていた。

##### D. 入居者の望み

特養の入居者を対象とした研究は、看取りの時期より前の入居者を対象に研究されている。入居者は家族や人とのつながりを大切に穏やかに過ごしたいと思っていた。入居者から会話・対話形式で話を聞く研究からは、日常の会話の中で入居者の希望する死が表現される可能性があることから、入所者が安心して過ごせる生活環境（人的・物的）を保障し、それをどのように汲み取るのかについて検討する必要性が明らかになっていた。

##### E. 特養の看護職による看取りケアに関する研究の課題

特養の看取りケアに関する研究は、看取りの場面を研究することの倫理的な困難さから、質問紙やインタビュー調査によるもので、実際に看取り期にある入居者や家族に看護職が関わっている場面を観察したものは少ない。今後は看護職による看取りケアの実際、入居者の日々の援助を主に行っている介護職との連携における看護職の役割、介護職との協働の実際、入居者と家族への関わりの実際を知ることができる可能性のあるフィールドワークを用いて看取りケアを記述していくことが必要であると考えられる。

#### Ⅴ. おわりに

本稿は、文献検討を通じて生活の場である特養の看護師による看取りケアとその受け手である入居者と遺族の体験に焦点を当て、これまで研究の成果と今後の研究の方向性を確認した。これまでの研究では特養の看護職を対象としたインタビューを通じて、看護職が自律的に看取りの時期を判断し、入居者が希望する場

で最後が迎えられるよう介護職や医師との連携を図り、職員との温かな交流のなかで最期までその人らしい生活が継続できるよう援助することを重視していることが明らかになっている。今後はフィールドワーク等を通じて、看護職による看取りケアの実際、すなわち入居者や家族への関わりや介護職他との連携を明らかにすることが課題と考える。

## 文献

- 青田正子・太田節子 (2012). 介護老人福祉施設における看護職のターミナルケアの取り組み. 滋賀医科大学看護学ジャーナル, 10 (1), 64-71
- 出村佳子・村中孝枝 (2010). 特別養護老人ホームで看取りをした家族の満足感の要因の特徴 遺族へのアンケート調査の結果から. 日本看護学会論文集: 地域看護, (41), 155-158.
- 出村佳子・野村友紀子 (2012). 特別養護老人ホームで利用者を亡くした家族の看取りの心情. 日本看護学会論文集: 看護総合, (42), 276-279.
- 長谷川浩子 (2004). 特別養護老人ホームにおける看護職者の役割に関する文献検討. 日本赤十字広島看護大学紀要, 4, 29-36.
- 池上直己 (2010). 平成21年度厚生労働省老人保健健康増進等事業地域における終末期ケアの意向と実態に関する調査研究 (Ⅱ) 報告書. [http://www.hpm.med.keio.ac.jp/pdf/roken\\_21.pdf](http://www.hpm.med.keio.ac.jp/pdf/roken_21.pdf) より、2015/7/7検索。
- 池上直己・池崎澄江 (2013). 遺族による終末期ケアの評価 病院と特別養護老人ホームの比較. 日本医療・病院管理学会誌, 50 (2), 127-138.
- 岩本テルヨ・南家貴美代・有松操他 (2007). 特別養護老人ホームのターミナルケアにおける看護アドボカシー実践に関する研究 看護師に対する面接調査から. 熊本大学医学部保健学科紀要, (3), 13-23.
- 岩瀬和恵・勝野とわ子 (2013). 看取りを積極的に行っている特別養護老人ホームにおいて看護師が高齢者の死期を判断したサインとそのサインを察した時期. 老年看護学, 18 (1), 56-63.
- 井澤玲奈・水野敏子 (2009). 特別養護老人ホームにおいて最期を迎える利用者への援助. 東京女子医科大学看護学会誌, 4 (1), 29-36.
- 小山千加代・水野敏子 (2010). 特別養護老人ホームにおける看取りの実態と課題に関する文献検討. 老年看護学, 14 (1), 59-64.

- 三菱総合研究所 (2013). 介護サービス事業所における医療職のあり方に関する調査研究事業報告書. 三菱総合研究所.
- 三富道子 (2013). イギリスにおける介護施設の動向. 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 27, 1-7.
- 長畑多代・松田千登勢・山内加絵他 (2012). 生活の場である特別養護老人ホームでの看取りを支える看護実践の内容. 老年看護学, 16 (2), 72-79.
- 永田文子・佐川美枝子・水野正之 (2014). 入所者と遺族が病院ではなく特別養護老人ホームでの看取りを選んだ理由. 国立病院看護研究学会誌, 10 (1), 2-12.
- 那須佳津美・深堀浩樹 (2014). 特別養護老人ホームで入居者を看取った家族介護者の経験. 老年看護学, 19 (1), 34-42.
- 小楠範子 (2008). 高齢者の終末期の意思把握としての回想の可能性. 日本看護科学会誌, 28 (2), 46-54.
- 大村光代 (2013). 特別養護老人ホームに求められる介護職に対する看護職の連携能力の因子構造. 日本看護研究学会雑誌, 36 (4), 47-53.
- 坂川奈央 (2014). 米国高齢者施設の査察報告第2報 - 米国における要介護高齢者の生活実態と意思決定に関する考察 -. 東北大学医学部保健学科紀要, 23 (1), 1-8.
- 流石ゆり子・伊藤康児 (2007). 終末期を介護老人福祉施設で暮らす後期高齢者のQOLとその関連要因. 老年看護学, 12 (1), 87-93.
- 流石ゆり子・伊藤康児 (2008). 終末期を介護老人福祉施設で暮らす後期高齢者の気がかり・心配. 山梨県立大学看護学部紀要, 10, 27-35.
- 白岩千恵子・竹田恵子 (2013). 看護職者が考える特別養護老人ホームの看取りケアの開始時期. 川崎医療福祉学会誌, 23 (1), 169-176.
- 鈴木亨・流石ゆり子 (2012). 終末期にある高齢者がその人らしい最期を迎えるために必要なケア 介護老人福祉施設熟練スタッフへのインタビューより. ホスピスケアと在宅ケア, 20 (3), 275-285.
- 牛田貴子・藤巻尚美・流石ゆり子 (2007). 指定介護老人福祉施設で暮らす後期高齢者にとって「お迎えを待つ」ということ 高齢者が語るend-of-lifeから. 山梨県立大学看護学部紀要, 9, 1-12.
- 全国老人福祉施設協議会 (2015). 特別養護老人ホームにおける看取りの推進と医療連携のあり方調査研究事業報告書. 全国老人福祉施設協議会.